

政治 経済 社会 国際 文化 思想



小林のりお「食卓の距離」

あれもテロなら、これもテロ。これを、テロ相対主義

# テロ相対主義の愚

テロは絶対の悪である。テロをやっつけるため、アメリカはアフガニスタンで戦い、フィリピンやソマリアにも飛び火する勢いだ。  
だが待ってくれ。爆撃で市民を巻き添えにするのも、テロではないか。グローバリゼーションのあおりで、飢えに苦しむ何億もの人びとも、テロの犠牲者ではないのか。

橋爪 大三郎



はしづめ・だいさぶろう 1948年神奈川県生まれ。東京工業大学教授・社会学。著書に「言語派社会学の原理」「世界がわかる宗教社会学入門」「政治の教室」など。

という。それならテロは絶対の悪、とは言えなくなる。テロをどう定義するかが問

題だ。はじめに理不尽に大勢の人が死ねば何でもテロ、日本人は考えてしまっていないか。これでは、アメリカ人がなぜ今回これほど団結を固めているのか、アフガン戦争をどう論理で正当化しているか、理解できなくなる。

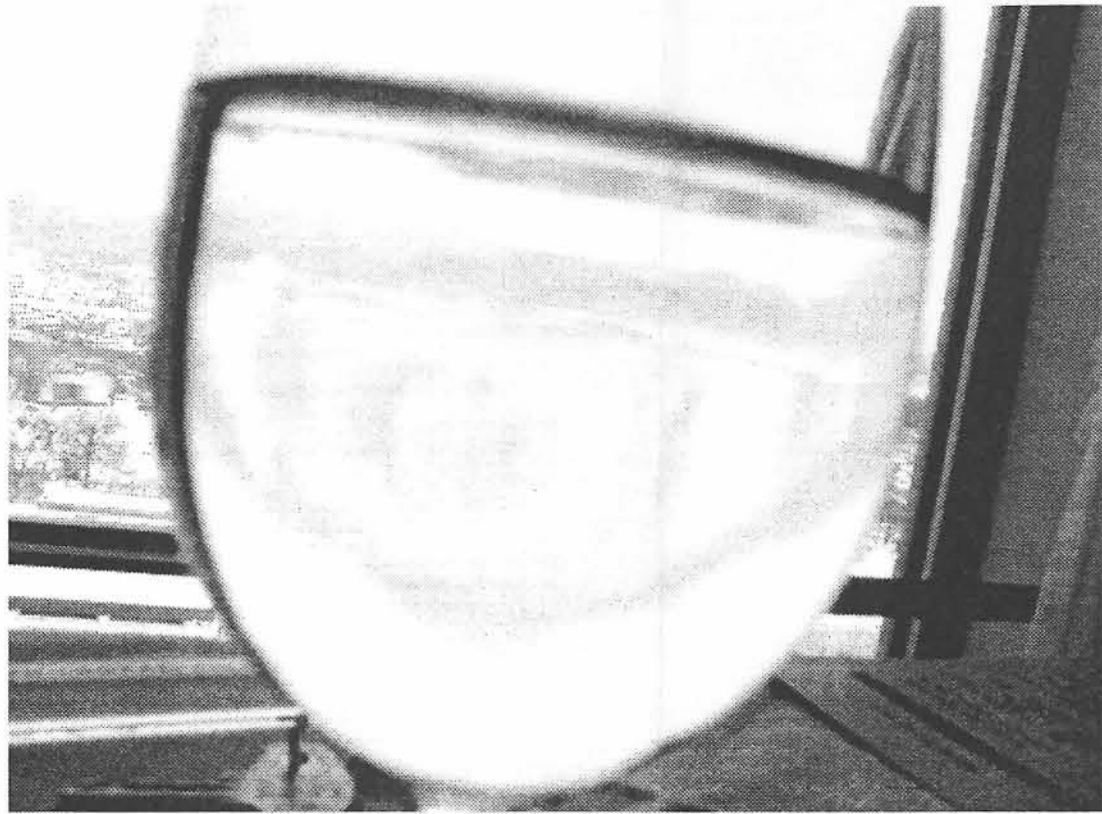
「人間の殺し方にもいろいろあると、キリスト教では考えているようです」と、私は発言した。一月九日に都内で開かれた「イスラム文明との

くすために、より軽微な殺人を行うことは正しいという考え方になる。テロに反撃するため、戦争に訴えるのは正義なのだ。ピンポイント爆撃が目標をそれ、市民が巻き添えになるのは事故である。貧しい人びとが飢えて死ぬのは残念なことだが、殺人ではない。むしろ、テロではない。「すべての命

## アクセスポイント

D-8-7007

政治 経済 社会 国際 文化



小林のりお「ガラスの内・外」

# 小泉首相 次の一手

田中真紀子外相の更迭で、小泉内閣の支持率が急降下した。自民党守旧派や野党が、一気に勢いづいた。押され気味の自民党は、つぎにどんな手を打つか。考えてみれば、それまでの高い支持率が異常だった。自民党の支持率は、だいたい三五%前後。いっぽう小泉内閣の支持率は七〇%台。反自民、非自民

の有権者が自民党内閣を支持するという「ねじれ現象」が、小泉政権の特徴である。「改革をやります」の看板の、中身が見えにくい小泉政権だが、アメリカの期待は熱い。二月十八日の会談でブッシュ大統領は、小泉首相への

「信頼」を強調し、改革を支持した。わざわざ明治神宮に参拝して、靖国問題の助太刀もしてくれた。小泉首相には何よりの追い風だ。とはいえ、自民党政権の枠のなかで、小泉首相は改革をなしとげられるだろうか。ア

メリカの研究者のなかには、小泉首相がいかばちかの政界再編に打って出るのではなにかという根強い見方がある。これはアメリカ政府の希望的観測でもある。自民党政権に代表される旧来の政治構造は、とくに耐用年数を過

せ、存続の必要を証明できなかつた法人はずべて廃止することにする。連日の公聴会はマスコミに報道され、国民の関心が高まり、族議員との対決も鮮明になる。守旧派と改革派の正面衝突だ。

頃あいを見計らって、国会を解散する。守旧派がたまりかねて、本気で小泉降ろしに動いたときがチャンスだ。首相に在職のまま自民党を離党し、解散権行使するという奥の手がある。そこまでやるかと小泉首相の支持率はぐんとはね上がるはずだ。

きている。支持率がこのまま下がって小泉首相がお払い箱になる前に、改革のために働いてもらおう。小泉首相としても、それ以外に活路はないはずなのだ。改革をしたくても自民党の流儀にはまると、法案を国会に提出する前に、ぶ厚い党内力学の壁に阻まれてしまう。それなら小泉政権の「ねじれ現象」を解消し、与野党にまたがる改革派を結集して、第二次小泉政権をつくらう。これが小泉首相にとって理想のシナリオだ。

東京工業大学教授・社会学  
大 三 郎  
橋 爪

ではどうすればよいか。舞台を公開の場に移すことだ。利害が衝突する課題、たとえば特殊法人改革をとりあげる。役人に、なくてもいい特殊法人はありませんかと尋ねるような問掛けをするかわりに、公聴会に資料を提出さ

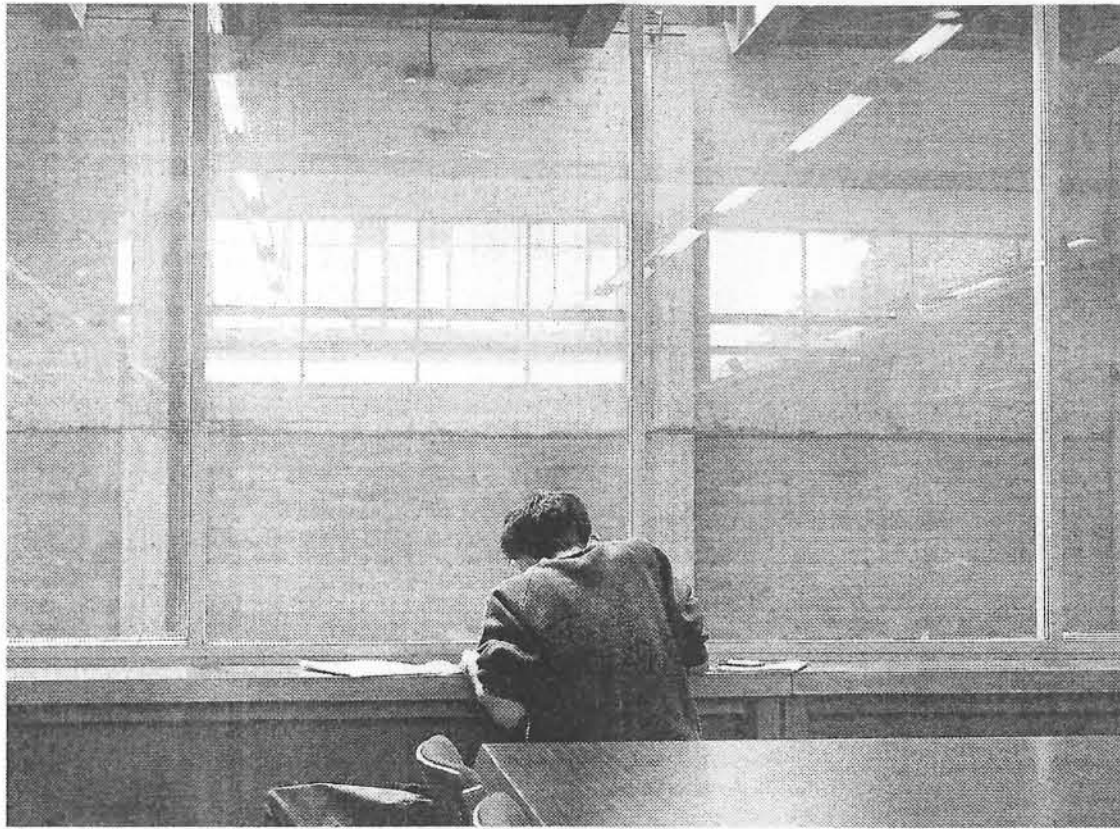
総選挙では、首相の改革案を支持する候補を多数当選させ、新しい政権与党を結成することをめざす。それには、与野党に関係なく改革派の候補者に、「小泉公認」を与え、条件はただひとつ、改革を支持し、当選後は離党して新党に加わる。ことだ。政策協議に時間が必要なら、「×週間に解散する」と宣言してもいい。政局はたちまち総選挙モードに入り、新党の大枠を構想する時間がまわれる。自民党議員は、政権を軸に結束しているが、いざ少数党に転落するとなるともろい。小選挙区で小泉人気が高ければ、チャンスはある。これをやりとげれば、小泉首相は歴史に名を残すだろう。

アクセスポイント

12-8-2002



政治 経済 社会 国際 文化



小林のりお「孤景」

この三月から、中国の主要一大学で百人、全国で二千四百人が試験の難関を突破して新入生となった。私の勤め先の東京工業大学の姉妹校、北京の清華大学でも、公共管理学院の新学期が始まったというので、さっそく見学に訪れた。

# 中国、科学の政治へ

清華大学は、朱鎔基首相の母校であり、江沢民主席の後継者と噂される胡錦濤氏もこの出身である。理工系のトップクラスの人材を輩出してきたが、最近では、経済管理

学院、人文社会科学学院、法学院、美術学院、公共管理学院、情報メディア学院など文系を拡充し、総合大学に変身を遂げた。予算も増え、広いキャンパスには新しいビルがよきよき林立している。

いて紹介する。納税者である国民が、政府の行動を監督し、コントロールするのが、本当の民主主義。この点日本はまだまだである。だから小泉首相に期待が集まっていると、政局の背景を説明した。

学生と一緒に授業を受ける。大部分が三十前後の政府職員で、女性もかなり混じっている。英語は、聴き取りや表現に力を入れている。学生のスピーチの時間もある。学生が定着するようなら、中国の政治システムは確実に変化するだろう。党が決めたことならなんでも従うといったやり方から、科学的根拠にもとづいた討論と世論形成が主流になる。天安門事件のような性急な民主化と違って、現実を踏まえた、専門家の批判にも堪える意思決定のやり方だ。これは中国にとって必要な変化であり、世界にとっても歓迎すべきことである。

橋爪大三郎  
東京工業大学教授・社会学

特別講義の時間があって、私は「日本の公務員制度と行政改革」について話すことになった。薩長藩閥政治の弊害をなくすために東大法学部ができた、というあたりから話し始め、公務員試験の仕組みやキャリアノンキャリアの区別、入省年次による昇進システム、縦割り行政と縄張り意識、天下りや特殊法人につ

ひるがえって、日本の意思決定はどうだろう。大学の研究は現実の役に立たないと、理由もなく思われている。それより、早く中国を見習うべきだと、私は言いたい。

アクセスポイント

2002-8-3

政治 経済 社会 国際 文化



小林のりお「朝の食卓」

# イスラムとの対話

河野元外相が先年約束して、実現した対話

初めて中東を訪れた。ペルシャ湾に浮かぶオアシスの小島に、バーレーンという国がある。同国で、日本とイスラムの文明対話シンポジウムが開かれたのだ。アラブを中心にイスラム各国から数十人の学者が集まった。

の第一回である。日本からの参加は六人。そこに、中東の専門家でもイスラム研究者でもない私がまぎれこんだ。中東はやはり遠い。イスラム教はなじみが薄いし、とりあえず石油をたくさん輸入しているだけ。いっぽうイスラム諸国は、日本への親近感が強い。日露戦争のおかげかもしれない。「非西欧文明としての伝統を保ちながら近代化をとげ、経済も発展できた理由はなにか」と繰り返し尋ね

られた。イスラム世界の抱える悩みの裏返しということなのだろう。分科会に分かれて討論となる。どうも勝手が違う。英語を使う約束なのに、いつの間にかアラビア語状態となっ

てい。ちんぷんかんぷんである。親切な人が通訳してくれるが、議論は勝手にどんどん進んでいく。対話だからには、こちらも話さなければならぬ。神道とイスラム教には共通点がある。教会がないので、世俗社会がそのまま神聖な空間となる。その共同体を守ることが、宗教的な義務になる。だから大東亜戦争は「聖戦」と言われたと話す、みんなちょっと静かになった。

だが、日本とイスラム世界には違いもある。日本は周縁的な文明なので、中国や西歐を真似しても平気だが、イスラム世界はかつて世界の中心で、西歐の真似はプライドが許さない。近代化がむずかしいのは、イスラム文明の構造的な問題だ、などと話すところが聞いている。やっとな対話が始まったと思ったら、会期が終わってしまった。

はしづめ だいさぶろう  
橋爪 大三郎  
東京工業大学教授、社会学

気がついたと、その一。こうした対話では日本について体系的に、しかも簡潔にまとめて話すことが大切だ。でも、そんな情報発信の専門家は少ない。これまでの専門家は、情報を受け取るだけだった。いないのならば、育てるしかない。その一。そういう情報を、ふだんから提供するとも大切だ。日本からの情報が乏しいため、なかなか対話の入り口になどにつけない。アラビア語なら理想的だが、せめて英訳で、日本の社会や思想についての基本的な文献が入手できるようにする。日本が国際社会の一員であることの、ひいては安全保障の、基本であろう。次回の対話を、東京で開くことになった。日本側の参加者も増えれば、もう少し対話らしくなるかもしれない。日本外交がなぜ弱いのかも、考えさせられた。日本人は、対話と理解と友好、とすぐ短絡する。でも、いくらイスラム世界が大事でも、最大の友好国はアメリカである。アメリカと同盟しながら、日本が中東諸国と友好を深めるとはどういふことか。これを説明できることが、対話の出発点であろう。私は日本の外交関係者から、そういう説明を聞いたことがない。

## アクセスポイント

2002-8-4 (4)



政治 経済 **社会** 国際 文化

アメリカの消費者は保護されすぎた。返品カウンターのこのにぎわいぶりは何だ。衣料品も、家電製品も、何でも堂々と返品できてしまっ。しかも、理由は？ なんて店員に聞かれもしない。  
私のよく行く、ホストン郊外の大衆スーパー、中国製などの商品

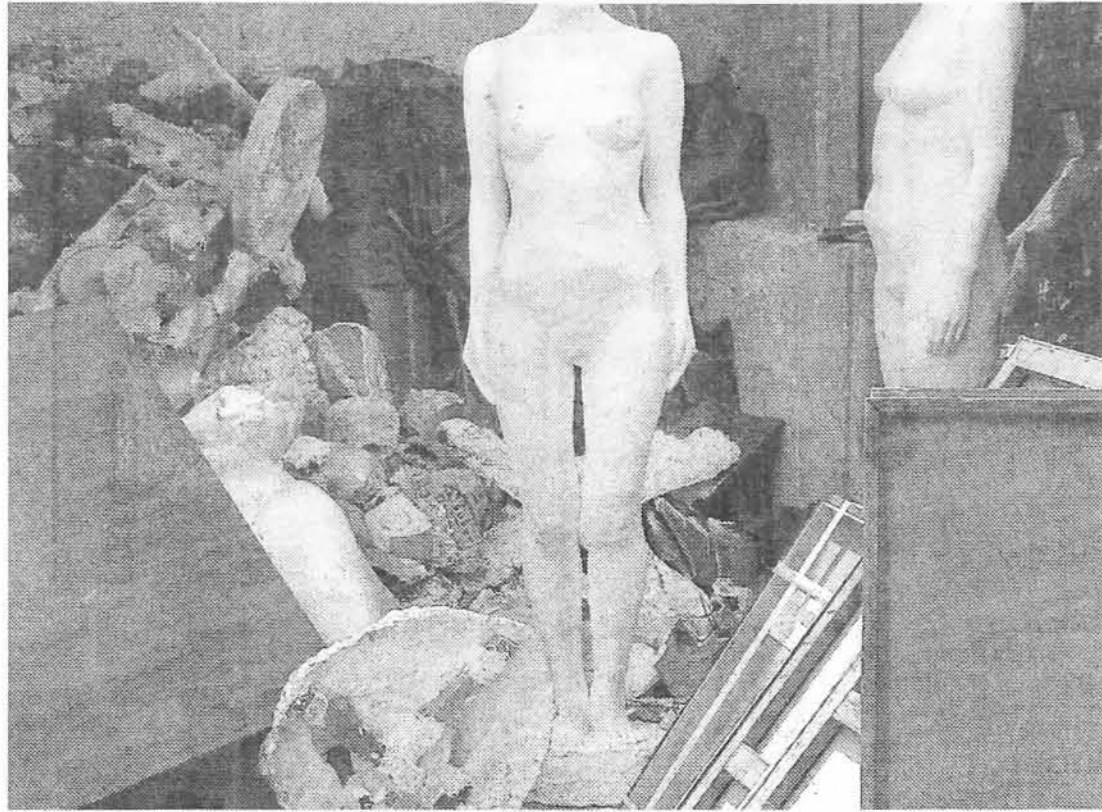
# 返品天国 米の知恵

が所狭しと並んでいる。どんなに売れていくにせよ、返品は原則返品オーケー。これでは、売り上げがいくらあったのか、レジを閉めてもまたわからない。返品の実例その1。就職の面接に替っていくスーツがなくとも、あわてることはない。スーパで気に入ったのを買って、面接がすんだらさっさと返品、代金は戻ってくる。

シャツやネクタイや靴も、このやり方で揃ってしまっ。靴の場合、店員は靴底を点検、ゴムが減ってささくれていると返品お断り。そこで実例その2。三日ほど履いて歩きにくいとわかった流行の厚

袋ダンスみたいなものである。  
ここで私は、旧約聖書の「落ち穂拾い法」を思い出した。小麦畑の収穫では地主はこぼれた落ち穂を集めてはいけない。収穫後の畑に入っ

## アクセスポイント



小林のりお「投棄」

橋爪 大三郎  
東京工業大学教授・社会学

底サンダルも、オリーブ油を塗れば見た目は新品同様、ちゃんと返品できた。実例その3は、ビデオデッキ。見たい映画があつて購入したが、子どもが勉強しないので、親が怒って返品。梱包が元通りでなくても平気である。

実例その4。冬に備え、毛皮のコートを二千円で買ったが、大きすぎた。ひと月後に返品して別のコートを買ったが、やはり気に入らない。それも返品したら、冬が終わってしまっ。ただでコートをひと冬着た計算だ。

友人・知人に聞いてまわると、こんな返品ストーリーがぞろぞろ集まった。なんとも大雑把だが、どうせ私の店じやないしと、店員は気にとめるふうもない。アメリカ流返品天国である。

こういうやり方で利益を受けるのは、低所得層である。スーパーが自分の家の、衣

困窮者の権利であることが定められたのだ。富者と貧者が共存していく知恵がそこにある。  
こんなにいい加減な返品ポリシーをもつアメリカが、では、いい加減な国かと言えはそうではない。議会の討論や大学の研究、先端技術の開発などは、厳密だし、素晴らしい。いっぽう、いい加減な返品の習慣などないし、つり銭も間違えないし、トイレもきれいに掃除する日本がちゃんとした国かと言えは、そうではない。政府や国会や企業の意思決定のあり方といった、大切なところがぐちゃぐちゃである。大学の研究や先端技術も、アメリカに大きく遅れをとっている。

日本人は、どうでもいいところをせめて正しい神経を使わずに、もっと肝腎なところを厳格に考えるべきなのではなからうか。返品天国にあきる日本の、まったく別な面が、それ以上にあきられてくる気がする。しかも日本人には、どうもその自覚がないらしい。

5-8-2002

政治 経済 社会 国際 文化

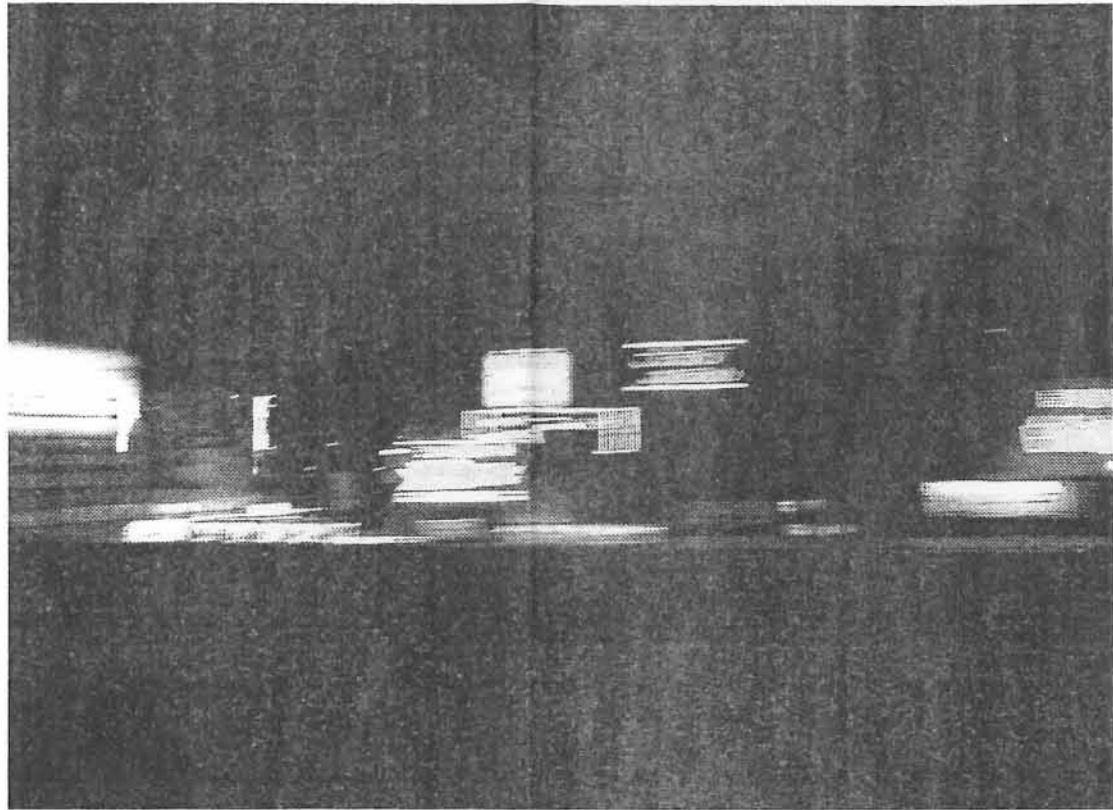
旧国鉄の天文学的な赤字が水増しになっていく。貸したお金が返ってこない。膨大な借入金で日本経済の足をひっぱっているのは言うまでもない。貸したお金の、元はと言えば、国民の預貯金や税金だ。完成したローカル線を、がら空きに走らせた。行ったり来たり

# 救国シルバーパス

している。いっぽう一生まじめに汗水たらして働いて、鉄道建設に貢献した人びとは、植木に水をやったり、つつましく老後を過ごしている。値段が高くて、国内の旅行はままならないのだ。

こんなことは、間違っている。旧国鉄の「主人」である国民は、出来上がった鉄道に乗る権利がある。とりわけ高齢の皆さんは、いま旅行しな

いで、いったいいつ旅行ができるのか。一緒に旅行する人



小林のりお「過ぎゆくネオン」

橋爪 大三郎  
東京工業大学教授・社会学

一枚で年間四十万円で決める。四十万円でも百六十万円分の旅行ができる計算だ。でも、押すな押すなになったらどうする？

そこで、シルバーパスの予約が正規運賃の乗客とちがったら、自動的にキャンセルにする。お盆や正月の帰省シーズン、連休などは正規運賃の乗客で満員だから、シルバーパスはまず使えない。オフシーズンのローカル線を中心に、のんびり旅行プランを組んで下さいね、という趣旨なのだ。

シルバーパスの、いいところその一。高齢者は、ぐんと格安の旅行ができて嬉しい。その二。JR各社は、追加のコストをかけないのに、増収になる。これまで旅行を我慢していた高齢の人びとが、もともと空いていた列車で旅行するだけなのだ。

その三。一緒に旅行すれば割引なので、つてを頼っておじいちゃん、おばあちゃんと旅行したがる若者が増える。最初はちょっと、運賃節約のつもりでもいい。旅を続けるうちに話が弾み、世代間コミュニケーションが活発になるはずだ。

いいところその四。旅をすれば宿に泊まる。全国津々浦々で経営に苦しむ日本旅館や温泉が、シルバーパスで息を吹きかえす。公共事業より、地場産業や地域振興に役に立つだろう。

ここで、悪いところがひとつもない。おまけに、一千万人の高齢者が四十万円ずつ余計に使って仮定すると、毎年八兆円、十年で八十兆円の増収が見込める。

ここまでうまく行くかどうか、話半分としても、誰も損せずに、みんなが喜ぶやり方で、旧国鉄の借金まで返せてしまうプランがあってもいいのだ。だから「救国」シルバーパスである。

シルバーパスは、記名式で一人一枚。残額を次年度へ繰り越したり、譲渡したりはできない。乗車の際には本人のID(身分証)を確認する。元手の要らない経済活性化。いっそやの地域振興券より、だいぶましな提案だと思いませんか？

アクセスポイント

2002-8-26



先週、研究室のメールを開けてびっくり。「パスポートとビザを盗まれました!!!」オーストラリアからの緊急連絡だ。九月の来日は無理だろうなあ。頭がくらくらする。パスポートを盗まれたクリス(仮名)は、シドニー工科大学の四年生。九月から東京工業大学

# 多文化試される大学

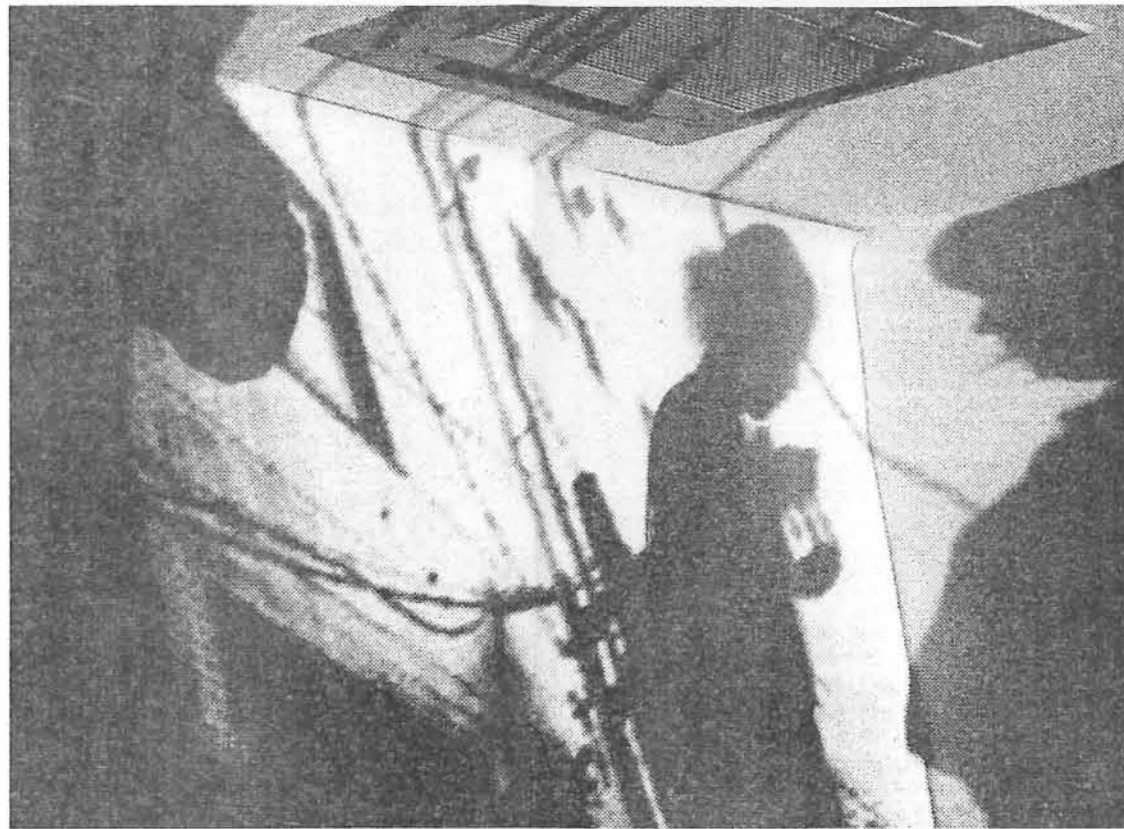
に留学の予定だった。私はこの大学との「窓口教官」なので、入国書類のやりとりや留学の手続き、こまごました連絡などを、お手伝いすることになっている。あわてて留学生課に電話する。パスポートは数日で再発行できても、日本で在留資格証明を再発行してビザを取得するのにまた一か月以上かかりそうだという。来日が遅れて、奨学金が取り消しになるかも? と気が気でない。

シドニー工科大学は、アジアの言語・文化・社会を学ぶ副専門コースを設け、毎年三百人以上をアジア各国に送り出している。これまでやってきたイボンヌも、バルナルドもアンディも(仮名)、みなし

が集まらないので、ハイテクの面でも遅れをとり、アメリカの大学が圧倒的な強みを発揮、日本は取り残されている。大胆な国際化を進め、英語とバイリンガルのキャンパスとし、世界の頭脳を集めたいとためである。

アクセスポイント

政治 経済 社会 国際 文化 教育



小林のりお「影街」

## 橋爪 大三郎

東京工業大学教授・社会学

すっかりした学生だった。若いうちに異文化に触れ、地球社会の一員として生きるという目標がはっきりしている。多文化主義オーストラリアの、新世代の若者たちである。

オーストラリアが白豪主義と決別し、アジア重視の多文化主義に転換したのは、一九七〇年代、労働党のホイットラム政権だった。つぎつぎ大胆な新政策を打ち出した移民大臣アル・クラスビーの活躍は、特に目覚ましかった(ケラスビー『寛容のレシビ』NIT出版)。多文化主義は今日、世界中で当たり前の考え方になっていく。とくに大学は、世界の人びとが集まる、理想の多文化コミュニケーションの実験場である。

九〇年代からの日本の停滞は、大学改革が進まないのも一因だと思ふ。日本人だけが固まった日本の大学は、外国人からみて魅力がない。人材

私でもできることをしよう、毎年数十人の学部学生を、中国短期留学に連れていく。研究室で指導する学生も、半分は留学生だ。

大学全体としては、何をしたらいいか。まず、英語の授業を増やして、キャンパスでは英語でこが足りるようにする。それには、日本人学生の英語能力も高めなければならない。第二に、ポストク(非常勤の研究職)や教授助教授にどしどし外国人を採用し、将来への進路を開く。奨学金の拡充も急務だ。第三に、入学選考の方法を改め、海外から応募できるようにする。アメリカの有力大学に流れている人材をひきつけるには、よほど思い切った手を打たなければだめだ。

だから、せっかく日本に留学しようとしている学生は、大事なお客さんである。一人呼べば、雑用で何日か時間がつぶれるがやむをえない。最後に、泥棒の皆さんにお願い。盗んだバッグに留学ビザ付きパスポートが入っていたら、本人に返してあげて。

2002-8-30

2002-10-18

政治 経済 社会 国際 文化 教育

# 大学改革へ慣例打破

吉本隆明さんのお宅にうかがった。表通りから一本入った静かな住宅街だ。出版社のIさんが、ビデオ機材を担いで同行している。

「よしもとはなのお父さん」と言わないと、最近の学生には通じなくなつた。でも吉本さんは、戦後日本を代表する思想家。しかも、私の勤める東京工業大学の卒業生である。

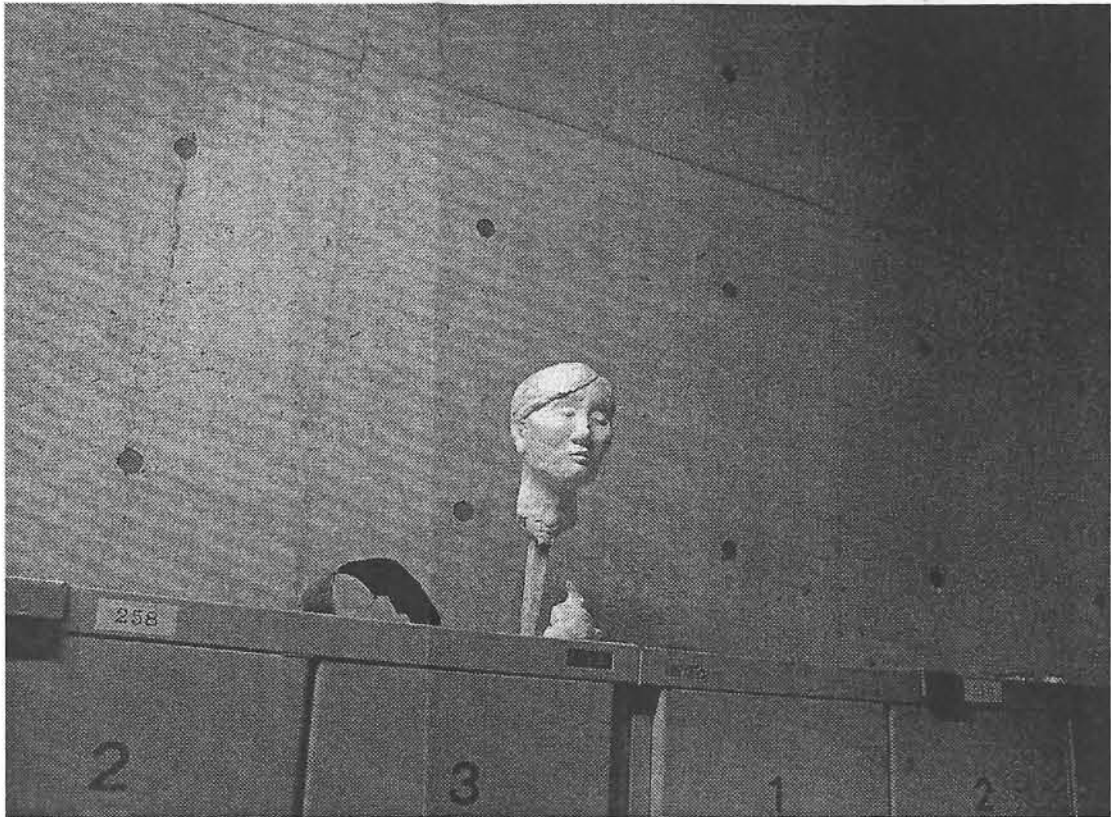
「時間ほどインタビューをした。吉本さんは、いつものざっくばらんな調子で、東工大の思い出、思想の転機、主要な著作のねらいなどについて答えてくださる。お元気な様子に安心する。感謝。」

取材ビデオを、急いで十分間に編集する。体力のこともあって外出を控えている吉本さんに、「吉本隆明をめぐるシンポジウム」へのビデオ出演をお願いしたのだ。

この吉本シンポジウムは、東工大が大手のカルチャーセンターと提携して行うもの。トには満足した」の字が並ぶ。ひと安心する。

そして十一月二日には第二弾、これも東工大にゆかりの「江藤淳をめぐるシンポジウム」。パネリストは福田和也、佐高信、井口時男の各氏だ。同七日からは、連続講座「価値判断と21世紀ビジョン」も始まる。

## アクセスポイント



小林のりお「ロッカールームにて」

だいさぶろう 橋爪 大三郎  
東京工業大学教授・社会学

社会理工学研究所棟の落成を記念する催しの一環だ。十月十二日、最新設備のデジタル多目的ホールに満員の聴衆が集まった。パネリストは加藤典洋、竹田青嗣、大澤真幸の各氏、望みうる最高メンバーだ。司会が私がつとめる。

かつて熱心に読まれた吉本思想の核心を、若い世代の人びとに伝えたい。その思いはパネリストに共通する。そのうえで、「吉本氏は国家廃絶を掲げたが、このモチーフは古くなった。いかに正当な国家を構成するかがわれわれの課題では？」と竹田氏。「人間は誰もが誤りうる。その必然を問うて内在から関係へ、そしてまた内在へと思索を積み上げたのが吉本氏だ」と加藤氏。「『マチウ書試論』は価値の争いの克服を主題とするポストモダンの書であり、いわゆるポストモダンの先を行く」と大澤氏。討論は大いに白熱し、回収したアンケート

もっと東工大らしいのは、連続セミナー「実践ビジネス戦略」。ゲーム理論の応用を手ほどきするAコース、日本の四大ビジネススクールの教授陣が競演するBコース、どちらも少人数のゼミで、経営者の意思決定を支援する。詳しい案内は大学のホームページ (<http://www.valdes.titech.ac.jp/sympo/menu.htm>) を見てください。

吉本隆明さんが東工大を巣立ってから半世紀、大学も変わりつつある。平成十六年度にはすべての国立大学が、法人化される予定だ。基本経費は国がまかなうが、あとは自由におやりなさい。外部資金を獲得し、社会に向けた活動を進め、知恵をしばって人類社会のプラスとならなければならぬ。



政治 経済 社会 国際 文化

「小泉首相が突然、北朝鮮を訪問すると聞いて、驚きましたか?」「いいえ。中国筋からその情報を数か月前に聞いていたので、驚きませんでした」。九月にハーバード大学のエズラ・ウォーゲル教授を訪ねた際の会話である。

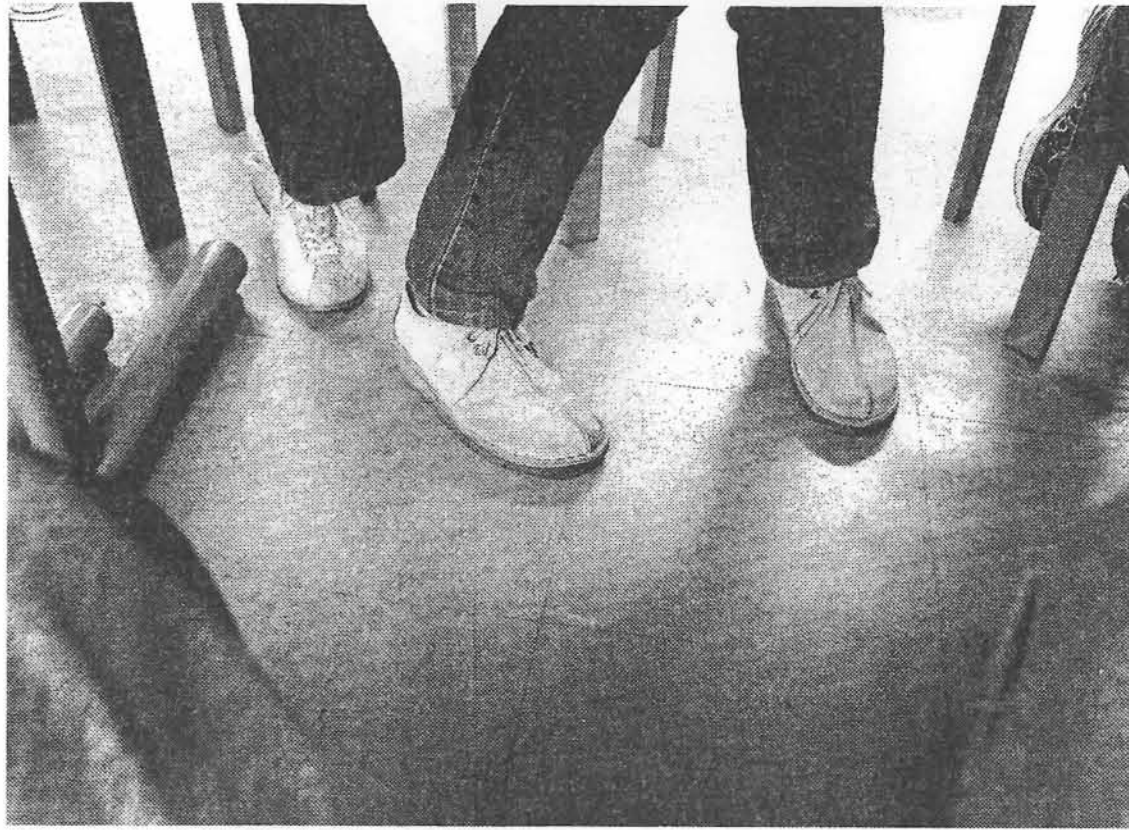
# 政策コミュニティ

「小泉首相が突然、北朝鮮を訪問すると聞いて、驚きましたか?」「いいえ。中国筋からその情報を数か月前に聞いていたので、驚きませんでした」。九月にハーバード大学のエズラ・ウォーゲル教授を訪ねた際の会話である。

本新聞は、拉致問題のことばかりです。でも冷静に考えて、第一は北の脅威、すなわち、安全保障問題。第二は、北への補償と経済協力を含む外交問題。拉致問題は大事でも、優先順位は下下のは

ループが、政策プランをA案、B案、……と練り上げて、討論を戦わせる。優れたものがだんだん勝ち残ったなかから、世論が形成され、政治家が意思決定を下す。政策の優劣と、意思決定の責任の所在が明確になる。民主主義はこうでなければならぬ。

## アクセスポイント



小林のりお「机の下」

橋爪 大三郎

東京工業大学教授・社会学

「困ったものですね。アメリカには政策コミュニティというものが出来ていて、政府、議会、シンクタンク、マスコミ、大学の人間が、現実的な政策論争ができるんです。部外者としての無責任な発言は少ない。政権が代わるたびに人間が入れ替わり、政府と大学のあいだに人事交流のあることが大きい。日本も早くそうなると思います」とウォーゲル教授がうなずく。

政策コミュニティこそ、いまの日本に欠けているものではないだろうか。国民の利益を考える専門家や知識人のク

ず。だが新聞が拉致問題ばかりとりあげるので、世論がその方向で固まり、外交も動かされかねない。仮に北が拉致者を全員返すと約束したら、歓迎ムードに流れ、国益を損ねるとして「した」と私の考えを

「困ったものですね。アメリカには政策コミュニティというものが出来ていて、政府、議会、シンクタンク、マスコミ、大学の人間が、現実的な政策論争ができるんです。部外者としての無責任な発言は少ない。政権が代わるたびに人間が入れ替わり、政府と大学のあいだに人事交流のあることが大きい。日本も早くそうなると思います」とウォーゲル教授がうなずく。

ではなぜ日本に、政策コミュニティが育たないのか。その最大の理由は、政権交代がないことだ。

自民党の半永久政権が続く限り、政務調査会や総務会、審議会や各省庁間の舞台裏での話し合いで、大事なことが決まっていく。国会は、儀式みたいなものになり、マスコミは批判めいた発言をしていればよいという当事者意識のうすい態度になる。

政権交代がないから、政策選択肢がないのか、政策選択肢がないから政権交代が起きないのか。ニフトリと卵のようだが、とにかく有権者が、積極的に政権交代を望むことが決め手になるはずだ。

ケネディ行政学院で、ウォーゲル教授とペアで講師をつとめる、川島元外務次官のゼミを見学する。これも政策コミュニティの一例だ。日本の大学でもこうした場を増やすべきだと痛感する。

2002-8-9 (9)